

過去から未来を考える

校長 相川 保 敏

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い致します。

さて、皆様はどんなお正月を過ごされたでしょうか。我が家では例年通り、年末に大掃除をし、玄関へ正月の飾りを付け、お節料理を用意して元旦を迎えました。元旦に神社にお参りし、三が日のうちに両実家へ年賀の挨拶に出かけたといった具合です。欧米のハッピー・ニューイヤーでは1月1日は祝日となるものの、次の日から日常生活に戻るようです。では、なぜ、日本では新しい年を迎える「正月」が、このように特別な日になっているのでしょうか。



調べてみると、「元旦」「正月」を重要な日と位置付けているのは中華文明圏の国々です。日本もそれに含まれます。そもそも「正月」という考え方は中国王朝、ことに隋・唐の時代から東アジアに広がって定着したそうです。中国王朝では、年の始まりには何はさておき、皇帝のもとに馳せ参じ拝礼すること(朝賀)が求められていました。それは臣下の務めであり、正月に参上しないということは、反乱行為の一つとみなされてしまうからだそうです。

日本にこの朝賀の儀礼が伝わったのは、7世紀後半だと言われています。天皇への朝賀儀は都ではもちろん、地方の出先機関である国衙(こくが)でも、その長である国司が郡司らを率いて天皇に遥拝し、その後、国司が郡司以下から拝礼を受けたそうです。こうした新年の拝礼はもっとも重要な年中行事となりました。やがて村落や家々にも広がりを見せ、村の長や、家の長に新年の拝礼をするようになりました。その際には多くの客が参集し、拝礼の後に宴が催されました。そうすると、家々では、年末までに大掃除を済ませておく必要があり、客も主人も晴れ着を用意し、訪問客へ出す料理の準備や新年の飾りつけをするというように

なっていました。年末年始の儀礼はもっとも重要な年中行事となり、日本中で今も大切にされています。現在、中国は日本の平和を脅かす存在として位置づけられていますが、こうした文化的つながりを知ることによって新しいよりよい関係を作っていけそうに思えます。

さて、今月のめあては「新しいことを考えよう」です。本校も70周年を経て、今後どう進んでいくべきかを教職員一同が知恵を出し合い議論を続けています。現在、本校では「英語教育」「ICT・プログラミング教育」をはじめとして様々な取り組みを行っています。一つ一つの取り組みが、本当に子どもたちの力になっているのか、どうすればさらによくなるのかを考えています。その際、現状から判断するだけでなく、その活動がいつから、どんなねらいで行われたのかを理解しておくようにしています。例えば、英語教育は今回の学習指導要領の改訂により、2020年から教科化され、その前身である外国語活動は2011年から必須化されました。英語というと何となく新しい取り組みのように思いますが、本校の沿革を見ると

- ・1958(昭33)年11月25日英語発表会開催
- ・1990(平2)年12月11日英語検定試験受験
- ・1994(平6)年12月4日第1回イングリッシュデーといったような記録が残っています。学習指導要領に取り上げられるからではなく、本校では開校当時から英語教育の必要性を認識し、現在に至るまでに脈々と受け継いできたということがわかります。こうした歴史を知ることによって、今後も子どもたちにとって楽しく、使える言語となる、相山小らしい英語教育を考えていく強い使命感が生まれてきます。様々な活動を見直し、新たなことに取り組む場合でも、その活動を過去から紐解くことが大切だと改めて感じています。

参考:なぜ、日本人は正月三が日をお祝いするのか? nippon.com

